

## 「文化政治」期の朝鮮語雑誌研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/17466">http://hdl.handle.net/2297/17466</a>

## 「文化政治」期の朝鮮語雑誌研究

奥田浩司

### 一 はじめに

一九一〇年に韓国併合<sup>①</sup>がおこなわれ、朝鮮は日本の統治下におかれることになる。しかし、植民地政策の過酷さゆえに不満が高まり、三・一独立運動が引き起こされる。一九一九年のことであった。

三・一独立運動以降、朝鮮総督府は植民地政策を融和政策へと転じ、いわゆる「文化政治」が「標榜」<sup>②</sup>されることになる。表面的なものであるとはいえ、文化的な営みが比較的自由となったことは朝鮮の人々にある種の可能性を与えることになった。その可能性とは、新聞・雑誌発行の自由度が増したことである。

そのせいもあって、「文化政治」期に入ると、日本に留学していた朝鮮人青年留学生たちを中心として、朝鮮語による機関誌・同人雑誌が数多く創刊されることになる。発刊・発売場所は、東京に限らない。京城<sup>③</sup>で発刊された雑誌もある。あるいは、東京で発刊・発売され、京城で売られている場合もある。ここから想像されるこ

とは、朝鮮語雑誌<sup>④</sup>は、朝鮮の青年知識人層のネットワークを支え、情報を共有する場となっていたことである。

とは言え、朝鮮語による表現が、多くの困難を伴っていたであろうことは容易に推測される。事実、「発禁」による欠号のあることに気づかされる。朝鮮語雑誌は、植民地下の状況を如実に反映させてもいるのである。

「文化政治」期の朝鮮語雑誌は、一部の雑誌を除いて、ほとんどの雑誌が短命に終わっている。そのため、記事内容には見るべきものが無いようにも思える。しかし、雑誌を一つのまとまりと見ることによって、そこから何か共通する要素を取り出すことができるのではないだろうか。さらには、一人の執筆者が複数の雑誌に書いていることもあり、雑誌間に共通の基盤があることを感じさせる。

他方、朝鮮語雑誌には、例えば白樺派や『青鞥』との関係のうかがわれる翻訳・評論・小説が散見されるのであり、日本近代文学との関係が想定される。したがって、「文化政治」期の朝鮮語雑誌の研究は、日本近代文学との関わりにおいて進められるべき側面を多

分に備えている。しかしながら、日本統治下の朝鮮語雑誌の研究は、管見によるかぎり、日本ではこれまであまり研究されてこなかった。恐らく、朝鮮語によって書かれてあることが大きな障害となっていたのではないだろうか。

それに対して日本統治下の朝鮮語雑誌研究は、韓国近代文学草創期の雑誌研究として、進められてきている。朝鮮語雑誌研究を進めるにあたっては、韓国近代文学研究の知見を参照することが必要となってくるであろう。本研究ノートは韓国近代文学研究の成果を参照し、作成したものである。

ともあれ、いったいどのような雑誌があり、どのような内容のものであったのかを知る必要がある。本研究ノートでは、ひとまず『現代』について紹介したい。『現代』は、同時代に創刊された数多くの雑誌の中でも、主立ったものの一つである。しかし、『現代』の調査については、十分とは言いかねる点が見られる。そこで、目次・奥付などを紹介しつつ、いくつかの特徴について報告しておきたい。本研究ノートは、実際に調査した知見に基づくものである。参考にしていただければ幸いである。

なお、『現代』は延世大学附属図書館に所蔵されている。目次については、図書館のホームページから見るができる。また、一号についてだけはあるが、ソウル大学附属図書館のホームページからも見ることができる。

(注)

(一)「日韓併合」ではなく、「韓国併合」とした。海野福寿『韓国

併合』(一九九五・五岩波)によれば「日本が韓国を併呑した併合条約の正式名称は「韓国併合に関する条約」であり、当時の新聞なども多くが「韓国併合」と称していたことにくわえ、国定教科書もまた、基本的には「韓国併合」だった(傍点原文)と指摘している。

(二) 次節で紹介する『韓国雑誌概観』と『韓国雑誌概観』(参考文献①)では、「文化政治」標榜時代とする。

(三) 「朝鮮」「京城」については、当時の呼称を使用した。

(四) 本研究ノートでは、これら朝鮮語で書かれた雑誌を朝鮮語雑誌とひとまず呼ぶこととする。

## 二 参考文献について

本研究をおこなうにあたって、主として参考にした文献を以下に記す。

- ① 韓国学資料叢書第1輯『韓国雑誌概観』と『韓国雑誌概観』(韓国雑誌概観並びに號別目次集) 金根洙編著 一九七三・九 永信。카메이(アカデミー) 韓国学研究所発行(括弧内執筆)者訳
- ② 『日本における朝鮮人の文学の歴史—一九四五まで—』任展擘 一九九四・一 法政大学出版社
- ③ 崔孝先「一九四五年以前の在日朝鮮人文学」『国文学論叢』二〇〇二・三

『韓国雑誌概観』と『韓国雑誌概観』(韓国雑誌概観並びに號別目次集)について、ここで簡単に紹介して

おく。本書は、一八九六から一九四五年にかけての「韓国雑誌」を網羅的に調査したものである。時代区分にそって一覧表が示され、さらに時代状況の簡単な説明、主だった雑誌の紹介、目次等が配されている。日本統治下の朝鮮語雑誌研究を行うにあたって、まず依拠すべき文献のように思われる。

本書では、以下のように時代区分がなされている。本研究においても、基本的にはこの時代区分を踏襲した。

舊韓末	(一八九六—一九〇九末)
武断政治時代	(一九一〇—一九一九末)
「文化政治」標榜時代	(一九二〇—一九三六末)
〔前期〕	(一九二〇—一九二九)
〔後期〕	(一九三〇—一九三六)
親日言論強要時代	(一九三七—一九四五、八・一五)

### 三 『現代』の位置づけ及び紹介

『韓国雑誌概観』別目次集』によると、「文化政治」標榜時代(前期)に創刊された雑誌は一六八種類、「文化政治」標榜時代(後期)では一五三種類に及ぶ。相当数の雑誌が創刊されていたことが分かる。

一方、その中でも、主だったものとしていくつもの雑誌名があげ

られている。「文化政治」標榜時代(前期)の「當時の重要雑誌各論」(「當時の重要雑誌各論」)にあがっているものは三十四種類である。これから紹介する『現代』はその内の一つである。

『現代』について、「當時の重要雑誌各論」では次のように簡単に解説している。

本誌는 1920년 1월 31일에 創刊되어 同年 6월 18일 通卷 6號로 終刊된、在日本 東京の朝鮮基督教青年會의 機關誌로서 그 編集兼發行人은 白南薰이었다。

(拙訳)本誌は1920年1月31日に創刊され、同年6月18日通卷6号をもって終刊された東京在住の朝鮮基督教青年會の機關誌である。その編集兼發行人は白南薰である。)

『現代』は、朝鮮基督教青年會の機關誌であり、東京で発刊・発売されている。朝鮮基督教青年會の機關誌であることの意味については、後に若干の検討を加えた。

では、以下に、実際に延世大学図書館において原本を調査した内容について報告したい。確認できた『現代』は、以下のものである。第一号(一九二〇・一)、第二号(同・三)、第三号(同・三)、第五号(同・五)、第六号(同・六)、第九号(一九二一・二)。

これから一号について、目次を記し、さらに若干の解説を加えていく。目次については、できるだけ原本に忠実な形をとった。さらに、日本語訳を付したものを別にあげた。

なお、調査にあたって、コピー、デジカメ撮影等は許可されなか

つたため、もっぱら筆写によって資料ノットを作成した。したがって、出来るだけ正確を期したものの、誤写などの可能性は排除できない。予めお断りしておきたい。

■第1号 1920年1月発行

【目次】

머리말

現代의 使命

進化論上으로 본 靈魂의 不滅 (一一)

識者の 研究를 要하는 實際問題 (四)

現代青年

勞働問題의 移動

文化의 宗教

두 길 (散文)

사랑의 어려움 (交友難)

聖誕과 歲暮

크리스마스 스케취 최승만

短詩三篇

自然의 自覺 (小説)

進化論上으로 본 靈魂의 不滅 (\*進化論上から見た靈魂の不滅) 白南薰 (一六)

識者の 研究를 要하는 實際問題 (\*識者の 研究を要する實際問題) 秋峯 (一九)

現代青年

勞働問題의 移動 (\*労働問題の移動)

文化의 宗教 (\*文化と宗教)

두 길 (\*二つの道) (散文)

사랑의 어려움 (\*交際の難しさ) (交友難)

聖誕과 歲暮 (\*聖誕と歲暮)

크리스마스 스케취 (\*クリスマス スケッチ)

短詩三篇

自然의 自覺 (小説) (\*自然の自覺)

白南薰 (一六)

秋峯 (一九)

崔承萬 (一四)

朴勝喆 (二二)

徐相賢 (二九)

可民 (三三)

高永煥 (三四)

李鼎魯 (三七)

極熊 (三八)

하이네 (\*ハイネ) (四二)

白岳 (四三)

【奥付】

大正九年一月二十八日印刷

大正九年一月三十一日發行

編集兼發行人 東京市神田区西小川町二丁目五番地

白南薰

發行所 朝鮮基督青年會

印刷人 折坂友之

【目次】 (日本語訳 \*印)

머리말 (\*卷頭言)

現代의 使命 (\*現代の使命)

編輯人 (二)

金俊淵 (二)

白南薰 (六)

秋峯 (九)

崔承萬 (一四)

朴勝喆 (二二)

徐相賢 (二九)

可民 (三三)

高永煥 (三四)

李鼎魯 (三七)

極熊 (三八)

하이네 (四二)

白岳 (四三)

編輯人 (二)

金俊淵 (二)

横浜市根岸町三千二百五十七番地

印刷所 福音印刷合資会社

横浜市山下町百四番地

発売所 朝鮮京城府堅志洞七九

永豊書店徳昌書館

浦鹽斯徳市二二三

徳昌書館

定価表 一冊 三十銭 郵税二銭

半年分 一円八十銭 郵税十二銭

一年分 三円五十銭 郵税二十四銭

#### ■留意点

1、表紙右上に一九二〇・一月発行と、西暦で記されている。

それに対して、二号以降は、元号で記されている。例えば二号では、大正九年三月二日発行となっている。ただし、二号以降には、大正九年二月十八日第三種郵便物認可という記述が加わっている。だとすれば、元号表記は「第三種郵便物」として「認可」されるために必要なことだったのであろうか。

他方、そのような現実的な要因はともかくとして、創刊号が西暦表記で発行されたことには、『現代』同人たちの意識の現れが読み取れるのではないだろうか。言うまでもなく「元号」は「天皇制」

と密接に関連しており、そのような表記を拒んでいるとも取れるのである。

2、表紙の裏面には、『創造』第四号の宣伝・目次が掲載されている。

目次には「文藝叫対畚雑感（評）：極熊」（拙訳／文藝に対する雑感）とある。『創造』復刻版で確認すると、確かに同評論が掲載されている。このことから「極熊」は、『現代』『創造』双方の雑誌に関わっていたことが確認できる。

3、裏表紙には『学之光』第十九号の宣伝・目次が掲載されている。

目次には「金俊淵、秋峯、崔承萬、朴勝喆、高永煥、白岳」の名が見られる。これらの執筆者は、『現代』創刊号にも名を連ねている。六名の執筆者が、『学之光』と重なっていることは注目される。（ただし、実際に『学之光』で確認しているわけではない。）

#### 四 白南薫について

『現代』の編集兼発行人である白南薫について、若干の報告をししておく。「나의一生」（拙訳／私の一生）（白南薫著[1932]新現実社／滋賀県立大学図書情報センター所蔵）の「白南薫先生年譜」によると、『現代』発行にいたるまでの白南薫の略歴は次のようなものである。

一八八五年 十一月三日 黄海道に生まれる

一九〇九年	三月	日本東京	明治学院	第二学年	入学
一九二三年	三月	同学院	卒業		
同年	九月	早稲田大学	豫科	入学	
一九一四年	七月	同	卒業		
同年	九月	早稲田大学	政治経済学部	入学	
一九一五年	九月	在日本朝鮮留学生	学友会	会長	
一九一六年	九月	同	会長	重任	
一九一七年	七月	早稲田大学	政治経済学部	卒業	
同年	九月	在日東京	朝鮮基督教青年会	総務	
一九二三年	一月	同	辞任		
五月		晋州一新高等学校普通学校	校長		

白南薫は、日本に留学し、明治学院、早稲田大学に籍を置いていたことが確認される。「朝鮮基督教青年会」では、「会長」「総務」を務めている。

最後に、吉野作造の言説を紹介しておきたい。吉野は、「朝鮮青年問題／朝鮮統治策の覚醒を促す」(『新人』大九・二、三)と題する評論において、いくつか興味深い指摘をしている。そのうち最も興味深いことは、「今日朝鮮人青年会の幹事として指導の任に当つて居る白南薫君は予輩の親友」としていることである。吉野作造と白南薫は旧知の間柄であった。なお、「朝鮮人青年会」とは、「朝鮮基督教青年会」のことであり「現代」の発行所である。

さらに、吉野は、この評論で、「一部の噂に過ぎない」としつつも、「在京の朝鮮人青年会問題に対する所謂当局者の態度」を批判

している。「一部の噂」とは、次のようなものである。

青年会問題といふのは斯うである。東京神田に朝鮮人の基督教青年会の会館と寄宿舎とがある。これが在留朝鮮人青年学生数百名の唯一の集会所であり、又随つて各種の陰謀の策源地になる。此処を中心として在京の青年学生は、上海の所謂独立政府なるものと聯絡もあるやうである。故に之を撲滅して仕舞ひたいといふやうな希望を当局者は有つて居たといふのである。

そして、吉野は、このような「当局」の「統治」への姿勢が「蒙昧」であると批判する。ただし、この評論で見える限り、吉野は植民地支配そのものを批判しているわけではない。その点から見れば、この評論における吉野の見解は限界を持っている。

他方、吉野の言説が興味深いのは、当時の「基督教青年会」のあり方、ないしは見られ方が見えてくることである。ひとまず先の一節から分かるのは、「基督教青年会」は、「陰謀の策源地」と見られていたことである。この事は、吉野の次のような発言からも確認できる。

朝鮮人青年会は、噂の通り、今日まで多年の間陰謀の策源地と当局から認められて居た。去れば何か集会があると其度毎に、警察の露骨なる監督を受くるは勿論、平素に於ても、常に密偵が其の付近を迂路つて居る。祈祷会などを静かにやつて居る場合にすら、密偵が其処に臨場して高声で話し合ひ、其の静謐を破るとい

ふやうな無礼は、予輩も屢々聞いた。そこで青年会が果して基督教の修養の場所といふ正当の目的を超へて、各種の不都合なる陰謀の策源地に利用されて居るといふは、一体事実なりや否やといふ問題が起る。之に対して予輩は此の觀察が或意味に於ては正しく、又或意味に於ては正しくないと答へる。

「基督教青年会」の活動は、官権注視の下に行われていたのであつた。では、官権のこのような見方は、間違つていたのであろうか。それとも正しいのであろうか。吉野は次のように続ける。

或意味に於て正しいといふのは、青年会が屢々独立運動の策源地となつたといふ事実は疑ひ無いからである。けれども、基督教青年会といふこと、陰謀の震源地であるといふこと、の間には、必然の關係があるのではない。基督教青年会なるが故に必然に陰謀の策源地となつたといふのではなくして、朝鮮人の青年学生に取つては、此処の外に集会の場所が無く、青年会は即ち彼等が公然集まり得る唯一の場所であるから、そこで自分から陰謀の策源地となつたまでの事である。

ここで重要なことは、「基督教青年会」が「独立運動の策源地」であつたことには疑問の余地がないことである。吉野は、白南薫とは旧知の間柄であると言っているくらいであるから、「基督教青年会」の内実にはある程度通じていたと見てよいであらう。したがつて、「基督教青年会」が、朝鮮の留学生たちが「独立運動」について語

り合う場であつたことはほぼ間違いの無いところではないであらうか。

さらに吉野は、次のように語っている。

人によつては、朝鮮人青年学生が全部斯る不穩の挙動に出づるのではなく、極く少数の者が誰かの煽動に因つてやるのだなど、樂觀するものもある。併しながら余輩の觀る所に依れば、直接積極的に之に關する者は或は夫れ程多数でないかも知れないが、受動的に之に關係するもの若くは少くとも之に同情共鳴するものを算へるならば、殆んど全部が皆其の仲間であるといつて宜からう。一人も残らず十人が十人まで同じやうなことを考へて居るといふのが、抑もどういふ訳か。之を問題とすべきであると思ふのである。

吉野の發言から、確認できることは、「朝鮮人青年学生」は、程度の差こそあれ「不穩の挙動」を支持していた事である。「基督教青年会」はその「会合」の場であつた。そして、「基督教青年会」の中心的役割をはたしていたのが、白南薫であつた。

もつとも、吉野は、「白君の如き温厚なる紳士か幹事の地位に居るといふことは、又青年学生の元氣を過度に奔放ならしめざる所以の息抜」となるから必要であると述べている。つまり、吉野からすれば、白南薫は、むしろ「独立運動」を過激にさせないための安全弁のようなものであつたわけである。

現時点では、はたして吉野の見方が正確であつたのかどうかは分

らない。この点は、今後の課題である。しかし、ひとまず言い得ることは、『現代』は「朝鮮基督青年会」によって発行された雑誌であり、だとすれば、『現代』の背景には「独立運動」に対する「朝鮮人留学生」の思いが息づいているということである。『現代』の執筆者それぞれの思いを貫いているものは一つであり、それは朝鮮の独立を希求してやまない若い朝鮮人留学生たちの精神である。そのような視点から、『現代』を読み解くことの必要があるであろう。ともあれ、研究は端緒に付いたばかりである。今後も、文化政治期の朝鮮語雑誌の紹介に務めつつ、日韓・韓日の交流する場に光を当てていきたい。

(注) 引用にさいして、旧字体は適宜新字体に改めた。

付記 本稿は、平成十八年度科学研究費補助金基盤研究C「[1910-1930 〈日韓・韓日〉文学交流の歴史―〈移入〉という視座から―」の成果の一部である。